

第7回佛教図書館協会研修会

「大谷大学近年収蔵の石刻經典・
造像記拓本について」〈講義〉

大谷大学教授 大内文雄

おはようございます。大内です。

私の持ち時間は30分ほどとなっておりますので、とにかく走ってお話し申し上げようと思います。

ここに本学の図書館に所蔵してあります拓本が、5点ほど掛けられています。本当はまだたくさん出してもらいたかったのですが、掛ける場所がないというので、この程度にしておきました。写真のカラーコピーで補いながらざっと、本学の近年収蔵の石刻經典・造像記拓本についてお話ししたいと思います。

こういう石刻經典というものについては、そんなに昔から関心を持たれて研究がなされていた訳ではなくて、つい近々、10年から15年くらいで、特にこの10年非常に盛んになってきたと思います。私も今、伊藤さんの方からご紹介いただきましたけれども、こういう石に彫られた經典について関心を持ちまして、後追する形で少し調べております。このレジュメの方に書きましたけれども、本年8月30日に中国の山東省の省都であります済南市において、山東省に現存する北朝摩崖刻經に関する、シンポジウムと見学会を含めての非常に大きな国際学術交流会が開かれました。これもおそらく画期的なことだろうと思います。私も参加いたしましたこういう学術交流が開かれたきっかけは何かといいますと、ここに書いてありますように、1995年に、

まだほんのつい最近のことですけれども、山東省の北西部に当たります洪頂山という場所で、非常に大規模な石刻經典の遺跡が多数確認されました。全く未確認であったという意味で、あるいは発見と言ってもいいと思います。本学の近年の収蔵の石刻經典というのは、その洪頂山の石刻經典のことです。

洪頂山の石刻經典は、經典自体はそんなに珍しいものではありません。ほとんど『金剛般若經』とか『文殊般若經』など、そういったものですが、非常に規模が大きいのです。話があちこち飛びますけれども、皆さんのお手元に、今、地図を配布していただきました。山東省の北斉朝摩崖刻經遺跡地図と、それから洪頂山の摩崖刻經遺跡の配置概念図です。これは、ここに論文名とお名前が書いてありますが、こういう中国の石刻經典、特にこの洪頂山を含めた山東省の石刻經典について、精力的に研究なさっている立正大学の桐谷征一という先生が作られた地図です。これを見ていただくとわかりますように、山東省には非常にたくさんの石刻經典があります。その一部がここに掛けられておりますが、その真ん中の、「浄心生香」と書いてありますね、あれは泰山の『金剛般若經』の字を適当に集めて、文章らしいものにして軸にしてあるものです。あんなふうには並ん

でいないと思いますが、でも字はああいうものです。非常に大きなもので、深く彫ってあります。泰山の場所は地図で見ていただいたらわかります通り、ここになります。これは山東省全体の地図ですが、位置的にはこういう形になります。日本人がよく行く青島市がここになります。関空から青島に直行便がありますので、簡単に行けるようになりましたけれども、だいたいこの山東省のこの辺りに集中してあるわけです。この摩崖刻経遺跡地図がこちらの山東省全体の地図のこの辺りになります。こういうふうに関係を見ていただいたらいいですね。大体山東省の西側に集中しています。

少しお話を元に戻っていたしますと、中国で石に彫られる仏教経典の発生というのがいつ頃かといいますと、現在では、この洪頂山ですね、この遺跡地図の一番端の方に洪頂山と書いてありますけれども、ここにあるものが一番早いというふうに言われるようになりました。95年に公表されてから、ようやくそれがわかってきたわけです。それ以前はどうかといいますと、その泰山の『金剛般若経』などが一番有名でありました。その他にもこちらの山東省全体図に赤い三角で山が書いてありまして、尖山とか崗山、あるいは鉄山、葛山などの山、ここにも点々と石刻経典が残っている。これはもう戦前から非常に有名でよく知られておりました。そういうものは、例えばこういう『山東北朝摩崖刻経全集』というのが出まして、どちらの大学もたぶん買っておられると思います。92年に出ました。当然この中には洪頂山は入っていません。現在はこういう非常に新しい史料が発見されて、研究が進展している最中、という時代になってきました。この書物に拓本の写真で紹介してありますものは、皆戦前からよく知られたものばかりで、字形もこの泰山の字

とほぼ同じで、こういう大きな字で彫ってあるわけです。

経典そのものは、そんなに珍しいというものではないですけれども、字が非常に大きくて立派だというので、書道の方でも珍重されているものです。泰山に関していいますと、皆さんのところに写真が一枚だけあります。これは私がこのシンポジウムに参加した時に、泰山に行きましたので撮ったものです。これは国家文物ですから、普通、柵の中には入れないんですが、山東省の文化担当者の好意ということでしょう、靴を脱いで裸足で入ってくださいと言われて、裸足で歩き回って写真を撮ったんです。こういう形で、本来ならここに川があって、こう水が流れていたんですね。それを北齊の時代に上流を塞ぎ止めて工事をしたそうです。非常に大きな字で、『金剛般若経』全文が彫ってあります。今、こういう赤い字になっているのは、ペンキが塗ってあるんですね、わかりやすいように。この拓本の一字一字がその大きさになります。非常に規模の大きいものですね。泰山は現在ロープウェイができて簡単に頂上へ行けるようになっております。しかしこれは所謂経石峪という場所にあります。レジュメに書いてありますけれども、泰山経石峪のこの摩崖刻経というのは、旧道にあります。昔、秦の始皇帝が泰山で封禪の儀式を行ったというものと、多分同じルートだろうと思いますが、何百段という非常に急な石段がありまして、その中腹にあります。一般の観光客はここまでなかなか行きませんが、こういうのが泰山のですね、中腹に彫ってある。これが何故ここにあるのかということが、今、研究されつつあります。こういったものが、ほぼ集中してこの山東省一帯にあります。それはいつ頃かといいますと、だいたい北齊の時代です。それと南北朝末期といっ

てもいい時期にも作られました。それはほぼ洪頂山の作られた年代でして、ここに年号と西暦を書いておりますが、だいたい6世紀の後半になります。ですから、現在からしますとほぼ1500年ほど前のものになりますけれども、それが現在もこうして残っております。

日本と中国は仏教の面では非常に共通点多いですし、日本の仏教は中国を源流とするものですが、非常に違いもあります。その一つをいいますと、経典を石に彫って残そうという発想がですね、日本にはあまり無かった。一部は勿論あります。九州にも『阿弥陀経』の石刻というのがありますけれども、そのぐらいのものでですね。これほど大きな、しかも大きな崖に、こんなに大きな字で彫るといことは無かったんです。そういう石に経典を彫って後世に残す、あるいは当時の人達に経典の姿を知らせるとい行為というのは、何に由来するかというと、おそらくもっと古く、中国では後漢の時代から、石に経典(ケイテン)、今度は儒教の方の経典ですね、経書(ケイショ)を彫ることが行われました。そこをレジュメの一番はじめに書いておきました。この儒教経典の石刻というのは、これはテキストを学生達に知らせるとい意味があります。最初はこの後漢の「熹平石経(キヘイセツケイ)」というものです。普通「一字石経」と言われて、隸書で書かれたものが、後漢の都の洛陽の、太学という当時の高級官僚の子どもたちを教える、要は大学ですね、その門前にずらっと並べられたという記録があります。これは殆ど断片しか残っておりませんが、その次に三国の魏の時代に、曹操が基礎を作った魏ですね、三国の魏の時代の末期になりますけれども、魏の正始年間に作られた石経があります。これも、同じ都の洛陽の、後漢の時代に作られた石経の傍に並べられたと言われている。

で、この石経(三体石経)は、こう括弧して書いてありますけれども、ここにその拓本が来ています。これは、後でまた見ていただければいいのですが、同じ字を上から順に、古体、篆体、隸体という三つの字体で彫られて文章になっています。そういったものが、都の洛陽に立てられました。この後漢と魏の石経はその後も残りました。後に北魏時代になりますけれども、北魏時代の後半は都は洛陽でありました。その同じ洛陽の都にも、かなり数は減っていましたが、同じように太学の前に、後漢と魏の時代の石経が残っていたという記録があります。そういったものを当時の人たちは常に目にしていた筈なんです。そういったものがたぶん背景になって、たぶんと言ったのは明確なそういうことを伝えた史料が無いからたぶんというわけですが、毎日毎日その建物、太学という教育機関、学校の前に、こういう石経が建てられていたので、それを見ておそらく仏教に関わる人たちも、仏教経典を残そうということで石に彫るとい行為に及んだのだらうというのが、普通言われている説明です。私もそう思います。

そうして最も早い時期に作られたのが、北魏という国が東と西に分裂いたしまして、一方が東の魏、東魏という国になり、そこで初めて、石に経典を彫ることが行われ始めます。そして東魏が北齊になります。その当時にはもう都は洛陽でなくて、もっと北の、河北省の鄴というところに移ります。その都の鄴は、ここの地図では全くわかりませんが、これが山東省の西北の隅でありますから、このもっと右上に行きますと、河北省です。現在、北京から遙か南の広州の方まで、いわゆる京広鉄路という幹線鉄道が通っております。その側に、今、高速道路がどんどんできておりますけれども、そのルー

ト上に当時の、もう秦漢時代以来の非常に有名な町がずーっと点在しております。有名な邯鄲なんていう町も、同じ名称で残っております。その邯鄲、『莊子』でいう所謂「邯鄲の夢」で有名なあの邯鄲の町の近くに、この北齊時代に作られた非常に大規模な石窟があります。そこにもいろんな経典が彫られております。そこは石窟に伴う経典です。我々仏教系の大学の人間は大蔵経を大事にします。大蔵会が明日から行われるというふうに、伊藤さんの方から説明がありましたけれども、今日、皆さんにお配りした『仏教伝来』、その書物の後半の方に、明日講演をなさいます竺沙先生の大蔵経についての文章があります。そういった大蔵経というのは、後でまた展覧の方を見ていただいたらいいですけども、ほとんどが印刷にされたものが中心です。現在の『大正新脩大蔵經』の底本も高麗版の大蔵経で、これは印刷された大蔵経ですね。今申している石刻経典というのは、それよりもずっと前の一切経、あるいは大蔵経という名称がだいたい南北朝末から隋唐時代にかけて定着しますけれども、その時代は手によって書写された時代です。そういう写経の時代、手によって書かれた時代と並行して、こういう石に経典を彫るという事業も行われたということを知っておいてもらえたらいいと思います。

いずれにしてもそうした、仏教の方で経典を石に彫るという行為の背景には、儒教の経典を石に彫って残す、この場合には、正確なテキストを公開するという意味で残すことが行われていたことがありました。唐の時代にも、開成年間、これはもう唐の末近くですけども、開成年間に作られた石経があります。これは最も大規模なものとして、またほぼ完全に残っているものとして、現在、国家文物に指定されて、西安の碑林に、全部の碑

石が残されております。この「開成石経(カイセイセツケイ)」の後にも、五代十国時代の前蜀、後蜀それから、北宋、南宋、清、それぞれに石刻の経典が作られていきました。こういった伝統が一方ではあるということです。

ただ、時間が無いので端折りますけれども、唐代までと唐代以降とでは、石刻、石に経典を彫る、儒教の経典を彫るという意味合いが全く違います。何故かと言いますと、五代十国から北宋代にかけて、印刷術、印刷のノウハウというものが、一般に流布して行きますから、当然、大蔵経も含めて、印刷にされて行きます。手で書かれるということが、段々廃れていきます。しかし全く無くなるわけではなくて、それは今度の大蔵会の展覧で日本の一切経においても同じようなことが行われましたように、いっぺんには廃れませんが、印刷物の方が普及して行きます。そういった時代に、北宋、南宋、清の時代に石刻の経典を作ったということの意味は、これはおそらく経典つまり儒教の経書のその非常に高い地位というものを象徴させるために、あるいは国家、あるいは皇帝の権威を象徴させるために作られたんだろうと思います。唐代までのものは、手書きの時代ですから、皇帝の権威と同時に、正確なテキストを学生たちに示すという意味合いがあった。そういった背景をもって、今度は仏教経典の方も石刻が作られたというふうに言っていると思いますが、時代によって随分その意味合いが変化します。

今日お話するのは、北齊時代のものですから、本当に最初のものですね。レジュメには、中国における仏教経典の石刻、と書いてありますが、そこには、仏教経典を公開し広めるという意味があります。

泰山にある、こういう誰でも行け、誰でも

見られる所に、『金剛般若經』のこんな大きな字を彫るというのは、おそらくこれには保存というよりも、人々にその仏教經典のありよう、その大切さを示すということがあろうと思いますね。もう一つには、保存という意味があります。これは、儒教のこういう經典の石刻と違うところです。保存というのは、具体的には石窟の中のこういった壁面に、たくさんの經典が彫られ、現在もそれらが残っております。今言いました、北京から南に走るその鉄道沿線上に幾つも石窟がありますが、その石窟に残されている經典というのは、こういった非常に大きな字形のものではなくて、字は非常に小さいです。けれども、石の部分のをきれいに磨きまして、そこに実にきれいな字体で、いろんな種類の經典が多数彫られています。ここにはその写真を準備しておりませんが、そういったものが現在も残されて研究の対象になっております。

そういった中で、最も大規模なものが、このレジュメの一番最後に書いておきましたけれども、河北省房山というところの、普通「房山石經(ポウザンセッキョウ)」と言われるものです。ここに佛教大学の方がおいでですけれども、もう随分昔に佛教大学の四条センターで、「房山石經」の展覧会がなされたことがあって、私もそこに参りました。「房山石經」は大体二箇所に分かれます。で、一つは石經山と普通言われています、隋から唐にかけての石窟が七つ現存する所。その中の最も古いものが、この第五洞、今は五番目の洞と編號がされていますが、通称「雷音洞」と言われています。雷音というのはお釈迦さんの説法のことです。雷の如く大きな声で法を説いたので雷音というわけです。石窟をまず掘り抜き、その掘り抜いた壁をきれいに磨きまして、そこに經典が彫っております。こ

の雷音洞の仏教經典については、戦前から非常に有名で、たくさんの研究がなされています。近々では中国からこういった『房山石經』という本も出ました。これはみんな石に彫られた經典です。房山雷音洞の洞の前に、唐の時代の石碑が二つ建っておりますけれども、その壁の向こうから二番目に掛けてありますのがその一つです。それはいつの頃かといいますと、ここに書いてありますように、則天武后が唐の政治権力を握った時代、則天武后が唐を奪って周という王朝を作りますけれども、その時代に作られた石刻經典です。現在も雷音洞のその洞窟の前に、雨ざらし、野ざらしで立っておりますが、唐代の、その則天武后時代のもので、何故則天武后時代のものとなるかといいますと、ここに「金輪聖神皇帝及師僧父母」と書いてあります。「金輪」の下の「聖神」の「聖」の字が、親鸞聖人の「聖」、「ひじり」ですね、「聖」の字が、則天武后が制定した則天文字で書いてありますから、明らかにそれは則天新字、あるいは則天文字と言われますけれども、それが使われているということで、武周時代、すなわち則天武后が権力を握り、皇帝の座に就いた周王朝の時代のものだとわかるわけです。これも結構古いものですね。房山での刻經は、レジュメに書きましたように、隋の煬帝の大業年間(605～617)から始まります。以後、明の末、天啓三年(1623)、という記録がありますが、ほぼ1000年間に亘って、石刻經典、石に經典を刻むということが、事業としてずっと継続してゆきます。

先程2ヶ所に分けられると言いましたけれども、その雷音洞がある石經山の方は唐代までの經典が殆どで、そこでは石窟が作られ、その中に、雷音洞は壁に刻まれてありますけれども、その他の石窟は、大体その向こうの拓本のあの經典の本文部分ぐらいの大きさの石

ですね、縦長の長方形の石に、経典が彫られています。その石、所謂石板を、それぞれの石窟の中に入れて、保存してあります。現在も格子を持つ石の扉によって、封がしてありますから、このくらいの隙間から覗くことができます。今でもその唐代の石板が、たくさん積まれています。そしてもう1ヶ所が、房山の雲居寺(ウンゴジ)というお寺です。非常に大きなお寺ですが、このお寺には、大きな塔、仏塔が二つありまして、北塔と南塔とあります。北塔は契丹民族の遼の時代に作られたもので、今でも残っておりますけれども、南塔は、向こうの、中国の方の説明によりますと、日本軍の爆撃によって壊されたというふうに言われております。戦後、中華人民共和国になってから、南塔の基礎を調査しましたら、その基礎の中から地下室が発見されて、そこから、遼、金時代、つまり、契丹民族の遼と女真民族の金ですね、その遼金時代の石刻経典が大量に発見されました。それがこれです。唐代までの石刻経典はああいいう大体縦長の大きな石板ですけども、遼金時代になりますと、こういうような、横長のいわば木版で刷った経典とほぼ同じような形で、行数も一行当たりの字数もほぼ同じで作っております。これについては竺沙先生のお話を聞いていただいた方がいいんですけども、こういったものが大量に発見されました。これが、ようやくこれも、1980年代になってこういうような拓本の影印の形で、我々外国人にも簡単に見ることができるようになりました。これは現在、房山の南塔の地下に、もう一度埋め戻されたということです。それはつい2年程前のことです。これらが、ほぼ隋代から明代までかけて、1000年間に亘って作られた「房山石経」という、最も大規模な石刻経典です。儒教の経典や、あるいは泰山のこういったものとか、あるいは房山の雷

音洞の前のああいいう碑文、石碑とかいうものは、誰にも見るということが可能ということで作られてありますけれども、その他の、石窟に納められているもの、あるいは地下に納められているものは、そういう意図を持っていません。つまり、将来に残そうという意図で作られたものです。だから、儒教の経典の石刻とは全く意味が違います。つまり、将来仏教がこの地上から消えた時に備えて、ずっと石に経典を彫り続けて行ったのです。漢族と、そして契丹民族と、女真民族、つまり当時の河北省一帯の支配者が代わっても、仏教経典の石刻事業は続けられたという意味で、房山石経は極めて重要な遺跡なんです。そういったものがあるということを知っておいていただけたらいいと思います。

もうこれで時間が10分、20分くらい経ってしまいましたけれども、ここで洪頂山の話に戻ります。ここに図書館の山内さんが作って下さったコピーがあります。この現場にもついこの夏行って参りましたけれども、非常に大規模なもの、小規模なもの、残っております。これは摩崖と称します自然の崖に彫られたもので、千五百年ほど経っておりますので、風化が非常に激しくて、現場に行っても何が書いてあるやらよくわかりません。その場合、拓本に取ればよくわかるということがあります。例えば、こっちの「大空王佛」の写真がありますね、これは大谷大学にありますが、とてもここでは展示できません。何故かというと、これは、高さが10mくらいあるからです。これは私が撮った写真です。下の方から、見上げる形で、撮っています。字の上を白く塗ってあるので字の姿がわかります。しかし近くで見ると薄く凹んでいるぐらいのことしかわかりません。

これを拓本に取るとこうなりまして、この「大空王佛」というのが、この洪頂山の近

辺にあちこちに彫られています。この意味合
いについては桐谷先生の論文を読んでいただ
いたらいいですけども、今でもいろいろな
人がいろいろな意見を出しています。だから
まだ研究の途上ですけども、こういったも
のが近々発見されています。もう一つ大事
なのは、こちら側の写真を見ていただいたら
わかりますけれども、この「大空王佛」とい
う大きな字が彫られているすぐ傍にです、
桐谷先生のこの「刻経配置概念図」を見て
いただいたら、ここに「安公之碑」というの
があります。「風門口碑」ともあり、⑭とい
うふうに書いてあります。14番というのは、
洪頂山の石経はこの谷あいの北側と南側に
彫ってあるわけですが、北側の方のこの14
番、これがその写真です。レジュメに書きま
したように、洪頂山の石経というのは、作ら
れたのは大体北斉の時代なわけです。その時
代に、お釈迦様が亡くなられてから、1620
年、あるいは1623年と書いてあるわけです。
「雙林後千六百廿年」あるいは「釋迦雙林後
一千六百廿三年」とあります。雙林というの
は、釈尊が沙羅双樹の下で亡くなられた、涅槃
に入られたということで、それが仏滅とい
うことになります。で、その年から1623年
が現在であるというわけです。問題なのは、
いわゆる中国の末法思想といいます、正法、
像法、末法と、三段階を経て、仏教がこの地
上から消えてしまうという思想ですね。日本
は丁度平安期にそれが盛んになって、我々
の、この大谷大学も含めて、浄土教系の大学、
あるいは日蓮宗系の大学も、あるいは禅宗系
の大学も、皆そういったものが遠い歴史的な
背景となっております。そこからいわゆる鎌
倉新仏教ができてきたというのはご存じの通
りですけども、中国では丁度500年早いわ
けです。正法500年、像法1000年と考えま
すから、1500年経って末法に入るとい

なんです。で、実際に現地に行って見てみ
ると、このように字が彫ってあります。1620
年経っていると言っているわけです。そうし
ますと、既に末法に入ったということが意識
されていたということになって、これは大問
題になってくるわけです。

北斉の時代に、すでに末法に入っている
ということを言った人は、これまでただ一人し
かないと言われてきました。ここ京都には
比叡山があります。比叡山は天台宗の聖地で
す。天台宗の開祖は天台智顛と言われる人
です。天台智顛はだいたい南北朝時代の南朝の
陳、最後の王朝の陳の時代に活躍した人
ですが、この智顛の先生に南嶽慧思という方
がおられます。慧思禪師が、末法思想を中国で
最初に、極めて明確に述べたということで、い
ろいろな人がいろいろな論文を書いておりま
す。慧思禪師のそういった末法思想を述べた
文章が、果たして慧思禪師のものであるかど
うかという、その根本的な疑問が提起され
て、まだ決着がついていなかったのですが、
今回こういうものが発見されたことによりま
して、南嶽慧思という方の、いつの時代に末
法に突入したかという考え方と、この1620
年云々という考えとはほぼ近いということに
なってくるわけです。そうしますと、これは
大問題になりまして、おそらくは浄土教系の
学問に影響を与えるだろうと思います。ここ
に書きましたように「雙林後千六百廿年」あ
るいは「釈迦雙林後一千六百廿三年」とあり
ます。1623年というのは、末法に入ったの
が1501年となりますから、122年目に当たり
ます。北斉のこの洪頂山の石刻の下限は河清
三年(564)です。河清三年というのは別のと
ころに明瞭に彫ってありますから、はっきり
わかるわけです。この564年をもとに計算を
しますと、末法の時代に入ったのは北魏太武
帝の時代(423-452)となります。我々浄土教

系の大学の人間にとりまして重要な人々に、中国の浄土三祖という、曇鸞、道綽、善導という方がおられます。曇鸞という方の亡くなった年というのはなかなかはっきりしていませんけれども、『續高僧傳』という曇鸞伝の最も基本的な史料によりますと、東魏の興和(539～542)の時代に亡くなったと言われます。河清三年からは大体四半世紀前のこととなります。ほぼ同じ頃ということになります。そうしますと、後に、中国浄土教の末法思想で言いますと、曇鸞の後を継いだ道綽という方が、明確な末法意識を持って浄土教の教えを広めたというふうに言われます。道綽は北朝末から唐初期にかけての人ですが、もとの東魏北斉の地域で活躍なさった方です。場所はこの洪頂山のような、現在の山東省ではなくて、山西省になりますけれども、北斉の領域であることには間違いありません。そういった面で、おそらく将来に亘って、浄土教、あるいは日本の仏教、あるいは中国仏教の歴史、あるいはその研究に、たぶん大きな波紋を広げるのが、こういう記録だろうというふうに思います。

締めくくりを行いますけれども、大谷大学において、こういった洪頂山の石刻經典の拓本を購入していただいたのは、研究の面でも、あるいは、仏教系の大学としての意味合いとしても、私としては非常に有り難かったと思っております。

もう一点が、もう時間が無いので端折りますけれども、レジメの下の方に陝西省耀県葉王山博物館、普通、耀県碑林と言われますけれども、ここに、仏教と道教に関する、造像碑がたくさん残っております。ここのレジメを読んでいただいたらわかりますように、中国にはたくさん造像記が今でも残されておりますけれども、この耀県碑林というのは陝西省の東北方、西安から行けばほぼ北の

方に当たるところですが、ここに書きましたように、こういったものがたくさん保存してあります。

その一つの拓本を出していただいています。一番向こう側のものが、あるいは「魏文朗造像記」と言われているもので、これは耀県碑林では一番古いと言われております。北魏時代の、第三代皇帝の太武帝の始光元年(424)という年号が見えると思いますけれども、古いものです。専門家の中には、70年ほど遅らせた方がいいと言う人がおります。その方がよからうと私も思いますけれども、少なくとも、北魏時代の造像記です。しかも、「魏文朗造像記」：仏・道混合像とここに書きましたように、仏教と道教が、混ざっています。文章そのものにそう書いてあります。他の造像記では、あるいはもっと明確に仏教の仏と道教の神様の像を両方彫る、ということが書いてあるものもあります。

後漢末期から西晋時代にかけて、現在の陝西省の渭水、西安の傍を流れている川を渭水といいます。渭水沿いにたくさんのチベット系の民族が住んでおりました。そうした中で後に五胡十六国時代にチベット系民族によって今の西安、当時の長安を都としていくつか国が建てられますけれども、そのうちの一つが、チベット系の姚氏が建てた後秦国です。その時に鳩摩羅什がやって来て、我々にとって馴染みの深い『阿弥陀経』などを訳するのがその時です。陝西省の今の西安よりも北側の地域というのは、北朝時代に入っても、当時チベット系民族がたくさん住んでおりました。図版では、黒点の三番目に、「夫蒙文慶造像記」と書いてあります。こういった夫蒙氏とかあるいは雷氏とか、チベット系の民族を示す姓を持つ人達の名前がたくさん彫っております。こういった面を考えていきますと、当時の一般民衆レベルと言ってもいいで

しょう、こういう人達、普通の人達の信仰形態というものがどんなものかということについての、貴重な情報を提供する史料とすることができます。我々、ここにもお坊さんの資格を持っておられる方が何人かおられると思います。専門僧の世界では、仏教と道教は峻別されますけれども、一般民衆の世界ではそうではないんだと、つまり仏教も道教も、自分の祖先の平安を祈り、自分の家族の平安を祈り、将来の平安を祈るという意味では一緒だ、ということを実物史料なんです。ここには例えば道教だけの造像もありますし、道教仏教が混合された造像もありますし、勿論仏教だけの造像もたくさん残っています。そういう地域なんです。しかも地域が限定された所でこれだけのものが集まっているというのも非常に珍しい例です。我々中国史を専門にしている者にとっては、こういった碑文、金属器に彫られた字、あるいは石に彫られた字、つまり石碑のような、石に彫られた字を集めたものをあわせて金石文と称しますけれども、これらのほとんどは所謂金石書と言われる、書物として提供されております。この耀州碑林のものは、あそこに掲げてあります「魏文朗造像記」は、古くからよく知られ金石書に収録されておりましたけれども、殆どのものはそういう金石書に載っていません。つまり近々になってようやく確認されたもの、殆どは戦後、というか、中華人民共和国成立後に確認され、整理されたものが殆どなわけです。そういう意味でも、新しい史料です。勿論こういう史料を使って研究なさった方は中国にもおられますが、まだそんなにたくさんはいない。そういったものも本学では新しい収集品として、四、五年前ですが、購入していただいたということになります。こういったものも含めて、仏教系の大学ですから、石刻經典や造像記のような、造像

記の場合は美術史としても非常に意味のあるものですが、文字史料としても価値の高いものを収集していただいているということになります。

非常に走りまわりましたが、これで終わろうかと思えます。ありがとうございました。